

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】楊 子震

【所属】筑波大学大学院

【研究題目】戦後初期の日華・日台関係－国民政府駐日代表団を中心に(1946－1952年)

### 【研究の目的】

本研究は、日華・日台関係の戦前・戦後の連続・断絶を明らかにしようとするものである。従来占領期日本に関する研究においては、中華民国(以下、国府と略称する)をアクターと見なさず、その果たした役割を等閑視してきた。他方、戦後初期の台湾史は、国府の対日関係の継続的な側面を無視してきた。ここで、筆者が注目したものは、国府の駐日代表団である。

国府の駐日代表団は、1946年に成立し、1952年に日華平和条約の発効をもって廃止された。代表団長が、主要戦勝国としての中国を代表し、対日理事会に参加した。代表団の交渉相手は、外交権を喪失した日本ではなく、連合軍最高司令官総司令部(GHQ)であった。日本における代表団の活動は、中国が連合軍の一員として日本への占領と管理に参加することを意味した。

以上のように、本研究は、駐日代表団を研究対象とし、日本、台湾及び米国に保存・公開された資料を照り合わせ、従来多く議論されない駐日代表団の存在に焦点を当て考察するものである。

### 【研究の内容・方法】

本研究は、マルチ・アーカイブズ手法を用いて行う外交史研究である。外交史におけるマルチ・アーカイブズのアプローチとは、特定の史料源に頼らず、関係各国の外交文書や公文書を突き合わせる作業である。

筆者は、まず日本、台湾で公開された公文書などを精査し、駐日代表団の果たした役割を考察した。日本では、外交史料館(戦後外交記録)、国会図書館(憲政資料室)を随時通り、台湾では、昨年3月に自己負担で台湾に一時帰国し、中央研究院近代史研究所档案館(外交部垂太司档案)、国防部史政編訳室(国軍档案)、国史館(国民政府档案)に訪ねていた。それぞれ所蔵されている関連資料を入手して整理・分析し、それを通じて駐日代表団の業務と活動をある程度把握した。しかし、現存の公文書から国府の政策決定過程を探究することは困難であることが分かった。

この問題を解決するため、国府上層部の考えを示す資料が必要になった。折柄、スタンフォード大学のフーバー研究所に保管されている『蒋介石日記』は、一昨年の公開に続いて昨年7月になってすべて公開された。私文書とはいえ、当時の国民政府指導者である蒋介石の考え方を把握することは意義深いと考えた。筆者は、『蒋介石日記』を閲覧するため、昨年の夏休みを利用し、アメリカのスタンフォード大学フーバー研究所を訪ね、

1ヵ月ほど現地で滞在し、同研究所を回っていた。『蒋介石日記』の中の対日政策や構想を示唆している部分を閲覧し、抄録していた。特にカイロ会談前後の蒋介石の記述は大いに参考する価値がある。

なお、米国での資料調査は、元々米国公文書館、メリーランド大学のプランゲ文庫にも訪ねる予定であった。しかし、本研究に関連している資料は国会図書館の尽力によって日本においても多くが利用可能になった。そのため、アメリカでの調査自体はスタンフォード大学のフーバー研究所に保管されている『蒋介石日記』に絞った。

### 【結論・考察】

以下に、今回の調査で明らかにした『蒋介石日記』の資料的価値とその問題点を述べながら、現時点の成果を要約する。

まず、単に蒋介石周辺の出来事を確認するだけなら、カバーされていない年代以外、党史館(台湾)の『大事長編初稿』と国史館(台湾)の『事略稿本』だけでも十分だと考えられる。しかし、上記の2者は多かれ少なかれ修正・脚色されたところがあるので、編集者の主観・意図を避けるため、直接日記の原本を当たる必要がある。蒋介石の書き癖と崩し字による判読が困難な箇所も多くあるが、肉筆に近い資料(一次複写物)が読めるということで、得られる印象や感想はやはり印刷物を読むこととは大部異なる。

続いて、日記という性質で、『蒋介石日記』にはごく簡単な記述しか書かれていない。また、殴り書きや記入した時間が不明な書き込みも多々ある。簡単な日記の記述から重要な歴史意義を読み取るためには、先行研究や関連の諸資料との参照は必要である。筆者は関連諸資料を把握した上で『蒋介石日記』の調査を着手したため、この問題はある程度克服した。

貴財団の研究援助を得て、アメリカに赴いて『蒋介石日記』を閲覧・抄録することが可能になった。『蒋介石日記』を手がかりにして国府の対日戦後処理構想を考察した結果、駐日代表団の活動が国府の対日政策を反映したことが示唆される。それは戦後初期の日華・日台関係において、駐日代表団の果たした役割はキーポイントということを意味している。今回のアメリカ資料収集は実り多いものであった。本研究は最終的に学術論文の形でまとめ、今年中、日本での学会報告と学術誌での発表を目指し、その後、筆者の学位論文の一部として提出する予定である。